コラム
子育て応援歌

スポーツは何のために、誰のために

－勝利至上主義はスポーツ観を歪める－

三　浦　捷　也
（三浦歯科医院　院長）

常識をはるかに超えた少年犯罪、幼児虐待など非人道的事件が相次いでいる。世の中が大きく様変わりし、人として生きる最も核心的部分が侵されているとしか考えられない状態が蔓延している。

私はこれまで、様々な形でスポーツと関わってきたが、その体験を通して、スポーツがその部分に活を入れ、人生の生きる力や勇気を与えることを学んだ。スポーツは私の生活の中で、無くてはならないものと言っても過言ではない。ところが、最近スポーツは勝敗や結果ばかりが重視され、スポーツを通して、人間性を高め、人として成長させる大切な役割を見失っている。その傾向は、年々低年齢化し、遊びのはずの小学生のスポーツにまで浸透している。

結果や栄誉のために「手段を選ばず」の考え方が世界のスポーツ界にまで広がり、ドーピングが深刻に拡大している。

私たちの少年時代には、オリンピックの内在的意義の重要性を説いた「オリンピックは勝つことよりも参加することに意義がある」と教えられて育った。しかし、今では死語となり「国威発揚」「メダル争い」が最大の関心事となっている。

国民のスポーツの普及と、体力の向上をはかる目的で開催された国民体育大会は、いつしか開催県の総合優勝のために、なりふり構わず選手を他県から移入することが当たり前になり、国体開催県を渡り歩く「ジプシー選手」まで誕生している。

学校における部活動でも「体罰・暴力・暴言問題・週休０日」等々、課題が山積し、世間を騒がせ「ブラック部活」として社会問題になっている。勝利至上主義は、人々のスポーツ観を歪めているようだ。

私は勝利を至上するスポーツ環境には、小学生のスポーツ活動がその背景の一因となっているとみている。

「高校野球＝甲子園」の社会風潮に押され、県内の小学生の野球も究極の目的は「甲子園」となり、「育てる」ことよりも「勝つ」ことが最優先となっている。子どもたちは、幼い頃から勝つことを目指し、勝敗を競い、チーム内ではレギュラー争いという体験を積み重ねている。こうした子どもたちのスポーツ環境では、自然と子ども時代から優勝劣敗の心理が形成され、自分が相手の上か下かばかりに神経質になる性質が助長される。また、勝利こそ唯一無二の価値だと刷り込めば、「人間関係」を「勝ち負け」の優劣でしか捉えられなくなる。近年「小中学生スポーツのからだへの影響」について問題視されているが、私は「からだ」のことよりもむしろ「こころ」への影響の方が大きいのではないかと心配している。

小学生時代に「スポーツ精神」の基礎が形成されることを考えると、この時期に「こころ」が歪んでいたのではスポーツの健全な発展は望めないであろう。

我々大人がスポーツに「哲学」を持たずに、勝敗だけに一喜一憂している姿勢は、周囲の子どもたちの姿勢にも伝播する。それだけではなく、勝つことばかりを考えていると、当たり前の道理をも見失い、結果、主役である子どもたちが置き去りにされ、「何のためのスポーツなのか、誰のためのスポーツなのか」が分からなくなってしまう。子どもの人生は子どものもの。子どもの人生は親元から離れてからの方が圧倒的に長い。親も指導者も子どもの無限の可能性と、子どもの成長を信じ、子どもの未来のために、目先の結果に捉われず、ゆったり向き合う必要がある。

近年、教育熱心すぎる親が子どもを追い詰める事件が報道され、「教育虐待」という言葉が認知されるようになった。その背景には「勝利至上主義」「学力偏重」の社会風潮が深く関わっていると言われている。子どもをめぐる社会問題と小学生のスポーツには、共通の病理のようなものを感じる。現在の子どもが抱える社会問題を解決するにも、勝利至上主義からの脱却のためにも、まずは、小学生のスポーツ現場から子どもに対する接し方を変える必要がある。子どもは単純に勝つことに憧れる。だから小学生時代に「スポーツは勝つためばかりではない」と諭し、スポーツの楽しさと共に「スポーツは何のためにするのか」を伝えるのが大人の役目である。スポーツはすべて勝利が二の次ということではないが、心身ともに発育途上にある小学生のスポーツは、仲間とともに体を動かし、楽しむための実践教育であり、スポーツはそのひとつの手段に過ぎないと考えている。

－最近の注目すべきメッセージ－

その１ プロ野球 横浜ＤｅＮＡ　筒香嘉智選手

筒香選手は、著書『空に向かってかっ飛ばせ！』（文藝春秋）のなかで「勝利至上主義」の弊害として次の３点を挙げている。

① 野球は子どものためではなく、指導者の実績や功績、関係者や親など大人の満足のためになっている。

② 選手が大人の顔色ばかりを見て、自分で考える習慣が身につかないまま育っている。

③ 甲子園で勝つことを究極の目標にした勝利至上主義が、子どもたちへの間違った指導法を招き、たくさんの有望選手が将来の道を絶たれている。

日本を代表する現役のプロ野球選手の言葉だけに、重みをもって受け止めている。

その２ 大船渡高校 野球部　國保陽平監督

最速163キロを誇る「令和の怪物」大船渡高校佐々木朗希投手は、今夏の岩手大会決勝で甲子園出場を目前にして、登板回避した。このことに対して賛否両論あり、様々な意見が交わされたが、國保監督は「投げられる状態にはあったが、故障を防ぐため私が判断した」と試合後に語った。高校野球に打ち込む理由は、「甲子園以外にもっと大切な目的がある」とする主旨の國保監督の発言は、今の「甲子園ありき」の高校野球の現状を考えると、極めて勇気ある英断と捉え、私は評価している。

筒香選手、國保監督お二人の発言・行動は、高校野球のみならず、「スポーツは何のために、誰のために」という命題に一石を投じた。少しずつではあるが、スポーツへの新しい潮流が感じられ、嬉しく思う。